

# 外国人による日本語作文の副助詞「も」のかきかえの傾向

東京外国語大学留学生日本語教育センター 土屋順一

tsuchiya@tufs.ac.jp

愛知県立大学外国語学部 土屋千尋

chihiro@for.aichi-pu.ac.jp

## 1 研究全体の概要

筆者グループは、日本語非母語話者が日本語作文をする過程を記録し、誤記憶、誤用、訂正などの実態を分析することによって、日本語の音声や文法を学習するストラテジーをあきらかにしようとする研究をおこなっている。学習者のストラテジーをあきらかにするために、「完成した」日本語作文ではなく、「過程」を記録し分析しようとするところに、従来にはなかった本研究のあたらしさがある。本稿では、集積したデータの中から、具体的な例として、副助詞「も」をとりあげ論ずることで、この研究のめざすところの一端を紹介したいとおもう。

## 2 研究の方法

パーソナルコンピュータとデータベースソフトをつかって、あらかじめ作成してある自由記述式のアンケートに、資料提供者は、回答を直接日本語でキーボード入力する。漢字変換システムはジャストシステム社のATOKを使用し、入力支援、校正支援の機能は起動しない。

質問は、前もってしらされていないので、資料提供者はディスプレイ上の質問をよんで、回答をかんがえながら入力していく。入力過程のディスプレイ表示とおなじものを、ビデオスキャンコンバーターで信号変換してビデオテープに録画する。終了後に、筆者グループは、ビデオテープを再生して、訂正、削除、挿入、変更、誤用などをチェックして、資料提供者の個人データ、時間の情報とともに、ラベルづけして、データベース化する。

### 2.1 資料提供者のデータ

この時点までの資料提供者は合計 250 名である。提供者は日本の大学・大学院に所属する日本語非母語話者で、日本語能力については、日本語未習で来日した者は在日 1 年以上、既習で来日した者の場合は、それと同等以上なら在日 1 年未満でもかまわない、ということにした。おおよそ日本語能力試験 2 級以上とおもわれる。平均在日歴は 35 か月で、最低 2 か月、最高 140 か月である。

資料提供者の母語は、おおい順に、北京語 36、朝鮮語 30、タイ語 20、マレー語 18、ベトナム語 15、インドネシア語 13、台湾語 12、モンゴル語 10 などで、アジアの言語がおおいが、全体では、ヨーロッパ語もふくめて 54 言語である。

### 2.2 文字資料データ

アンケートの質問項目は以下のとおりである。

- (1) これまでに、日本国内でどんなところへ行きましたか。
- (2) 大学に入ってから日本語の授業について教えてください。
- (3) 日本語でレポートを書いて出すことがありますか。書く時ワープロやコンピュータを使いますか。
- (4) 大学でコンピュータを使うことがありますか。どんな時に使いますか。
- (5) このセンターにいた時とくらべて、大学に入ってからどんなところが変わりましたか。  
／留学する前と、留学してからと、どんなところが変わりましたか。
- (6) 他にメッセージがあれば、何でも書いてください。  
／日本や大学に関する感想など自由に書いてください。

この質問に対する回答は、総入力文字数約 96000 文字（最低 80 文字、最高 1552 文字、平均 382 文字）で、総入力時間は約 125 時間（最低 6 分、最高 1 時間 58 分）である。

### 3 従来の方法とのちがい

従来、外国人学習者がかいた日本語作文の誤用分析は、学習者が完成して提出した作文をチェックして、誤用と判断したものを集積する方法でおこなわれてきた。電子化してデータベース化する、あるいはデータの分類のしかたにあたりしい理論をとり入れる、といった改良はあったが、学習者が作文をかきあげたあとから、誤用例をえらびとって分類する、という点ではおなじである。この方法は、学習者側には日本語以外の能力や設備が必要ではなく、データの同時大量収集が可能である反面、どのようにして学習者が作文を完成したか、という過程は一切わからない。一方、筆者グループがおこなっている方法は、ひとりひとりの学習者に依頼して、パーソナルコンピュータの画面上の自由記述式アンケートにこたえる形式で、直接キーボード入力してもらい、その過程を信号変換してビデオテープに記録し、それを再生してラベルづけする、というものである。この方法では、学習者側にある程度のコンピュータリテラシーが必要で、データ収集者側にも、通常のパソコンにビデオ信号変換装置とビデオデッキを接続する、という環境が必要になり、データの同時大量収集がむずかしい。しかし、中断、訂正、削除、挿入をふくむ文章作成のすべての過程を記録することによって、これまでになかった分析が可能になるわけである。

たとえば、「私が日本に来る時、家族はお金をくれました。」という文を学習者がかいた場合、従来の誤用分析では、「誤用なし」「この学習者は基礎的な文法項目を習得している」というような情報しかえられない。ところが、この一文のキーボード入力過程をビデオテープに記録して分析すると、「私は」→「私が」（「は」と「が」の区別）、「日本で」→「日本に」（「に」と「で」の区別）、「来た時」→「来る時」（時制規則）、「あげました」→「くれました」（接受表現の規則）というように訂正がおこなわれていることがある。完成した文ではなく、入力過程における訂正事項のデータを大量に集積し、文法項目（上記の「は」と「が」の区別など）ごとにラベルづけして整理していくと、ある文章表現を完成させるために学習者がどんな言語ストラテジーをつかっているかがあきらかになり、それを母語別、あるいは学習段階別に類型化することが可能になるというわけである。

### 4 副助詞「も」に関する調査

格助詞に関する訂正は、かなり出現頻度がたかく、入力過程の分析に適しているとおもわれるが、後続する動詞の格支配とあわせてかんがえなければならないので、問題が複雑になる（土屋 1998）。そこで、今回は副助詞「も」を分析の対象にすることにした。副助詞「も」は、日本語教育のはやい段階で導入される基礎的な項目である上、アンケートの質問項目（例示要求）から判断しても、出現頻度がたかいと予想される。そして、つぎのような仮説をたてた。

#### ・仮説：

アンケートの回答をかんがえながら入力していく、という実験方法の性質と、「とりたて」をあらわす副助詞「も」の機能をかんがえあわせると、「も」を削除する変更よりも、加筆する変更の方がおおいはずである。

#### 4.1 副助詞「も」に関する変更

前述のデータベースの副助詞「も」を検索したところ、596 箇所が見つかった。このうち変更だけをしらべると、つぎのようになった（表参照）。

検索の結果、「も」の削除の方がややおおく、『「も」を削除する変更よりも、加筆する変更の方がおおい』という仮説は否定された。

表：「も」の変更

「も」の削除	件	「も」の加筆	件
主格「も」を「が」「は」に	8	主格「が」「は」を「も」に	7
対格「も」を「を」に	5	対格「を」を「も」に	2
「にも」「でも」を「に」「で」に	5	「に」「で」を「にも」「でも」に	5
「も」を「と」「や」「など」に	5	「と」「や」「など」を「も」に	4
「時も」を「時」に	2	「時」を「時も」に	1
「いつも」を削除	6	「いつも」を加筆	2
「も」をふくむ句を削除	15	「も」をふくむ句を挿入	2

#### 4. 2 副助詞「も」に関する変更の事例

それでは、資料提供者たちは、副助詞「も」に関して、どのような変更をしているのか、いくつかの事例を検討することにする。

##### 4. 2. 1 副助詞「も」を加筆する変更

###### 4. 2. 1. 1 福建語話者 未習で来日後5年 質問(4)の回答

「はい。レポート作成以外、電子メールやホームページの検索もしています。また、専門知識を用いた分析を」

↓

「～また、専門知識を用いた分析もコンピュータのプログラムを使っておこないます。」

○コンピュータのプログラムをつかっておこなう作業について、「電子メール」、「ホームページの検索」あげ、さらに、「分析」をくわえるために、「も」を加筆する変更をおこなった

###### 4. 2. 1. 2 広東語話者 未習で来日後4年 質問(6)の回答

「日本へ来てからもう4年間が立った」

↓

「日本へ来てから4年間が立った」

↓

「日本へ来てから4年間も立ったというのは本当に信じられません。」

○2回変更をおこなっている。2回目だけみると、「4年間」という期間を強調するために、「も」を加筆する変更をおこなったということになる。しかし、1回目の変更からとおしてみると、強調の表現方法を、副詞「もう」から副助詞「も」に変更したということがわかる。

###### 4. 2. 1. 3 インドネシア語話者 未習で来日後2年 質問(6)の回答

「この間、センターでもすぐにインターネットが使えるようになる聞いたのですが、今まではまだできていないようですね。それができるともっと便利なんじゃないかなと思っています。先生方は」

↓

「～。先生方もお元気でお仕事に頑張ってください。また4月からここに来る後輩のこともよろしく  
お願いします。」

○文章の最後にあたって、先生に対する挨拶をかこうとして、「先生方は」ではじめたが、挨拶は  
慣用句的なものであり、「先生方も」でないと「先生方は」では、次がつかない。そのことに  
気がつき、「先生方も」と「も」の加筆する変更をおこなったということがかんがえられる。

#### 4. 2. 2 副助詞「も」を削除する変更

##### 4. 2. 2. 1 朝鮮語・北京語話者 大学で4年間日本語専攻後来日11年10か月

###### 質問(5)の回答

「見聞が広がりました。より客観的に物事を考えたり、見たりするようになったような感じをします。  
たぶん他にも自分にも意識しない、」

↓

「～。たぶん他に自分にも意識しない、いろいろな収穫があるに違いないと思います。」

○自分が感じる「収穫」として、「見聞が広がったこと」、「より客観的に物事を考えたり、見た  
りするようになったこと」をあげ、さらに、「他にも自分でも意識しないいろいろな収穫がある」  
とつけくわえたかたのではないかとおもわれる。ところが、「自分でも」を「自分にも」とか  
いたので、「他にも」「自分にも」と「～にも」がつつくようになってしまい、同型の連続をさ  
けようとして、「他にも」の「も」を削除する変更をおこなったとかんがえられる。

##### 4. 2. 2. 2 カンボジア語話者 未習で来日後5年1か月 質問(6)の回答

「日本はアジアの誇りだと思います。どの分野も発達」

↓

「日本はアジアの誇りだと思います。どの分野もさいこ」

↓

「日本はアジアの誇りだと思います。工業、産業などがとても強いです。」

○「どのAも」とのべることは、「Aに関するすべて」ということになる。「すべて」ではないの  
で、「も」を削除する変更をおこない、「～などが」と例示する表現にすることによって、自分  
がのべたいことをより正確に記述しようとしたとかんがえられる。

##### 4. 2. 2. 3 タイ語話者 未習で来日後1年7か月 質問(5)の回答

「なかなか普通に外国人との関係のない日本人は私達の日本語がわかってくれないのです。生活も日  
本人の友達と話して、あまり面白くない。日本語が上達していないぜいであるかもしれません。試  
験の時、」

↓

「～。生活では、日本人の友達と話して、あまり面白くない。日本語が上達していないぜいであるか  
もしれません。試験の時」

↓

「～。生活も日本人の友達と話して、あまり面白くない。日本語が上達していないぜいであるかもし  
れません。試験の時も、書く試験であれば、ちょっと難しいです。」

○「試験の時」に「も」をつけて、とりたてるように変更しようとした。そうすると、「生活も」  
「試験の時も」と同型が連続するので、先に「生活も」の「も」を削除した。しかし、「AもB  
も」と対応させる表現も可能であると気づき、「生活も」を復活させて、「生活も～試験の時も

～』という文型を完成させた。

#### 4. 2. 2. 4 朝鮮語話者 未習で来日後7年1か月 質問(1)の回答

「韓国から家族が訪ねて来たりすると、東京によく行きます。

研究旅行に行った事もあります。」

↓

「～。渡橋には、研究旅行に行った事もあります。」

↓

「～。東京には、研究旅行の目的でも何回か行った事もあります。」

↓

「～。東京には、研究旅行の目的でも何回か行きました。」

○2回変更おこなっている。最初、「も」を追記した結果、「～目的でも」「行った事も」と過剰になったので、次に、「行った事も」の「も」を削除した。

#### 5 まとめと今後に向けて

本稿では、日本語非母語話者が日本語作文をする過程を記録したデータの中から、副助詞「も」をとりあげ、「も」の加筆と削除の変更の実態を分析することをこころみた。分析の結果、『「も」を削除する変更よりも、加筆する変更の方がおおい』という筆者グループの仮説は否定された。

日本語では「きょうは、午前中は、関東北部ははれますが～」とか「授業がなくても、土曜日也非常勤講師も出勤します」というように「は」や「も」は連続する表現が可能であるが、資料提供者の変更をみていくと、同型連続をさげようとする傾向がみられる。これはいかなる理由によるものであろうか。資料提供者の母語による影響もあるのであろうか。母語にかかわらず、学習者全般にいえることなのであろうか。また、資料提供者が格助詞に自信がない場合に、副助詞でごまかして回避しようとする傾向の可能性もあるようにおもわれる。以上の原因をさぐるためにも、さらに、入力過程データの収集につとめて、データの量をふやす予定である。

さて、日本語母語話者のものと比較するとどうなるのであろうか。日本人による日本語作文入力過程のデータの収集にもつとめ、それぞれの入力過程を比較することをおこなえば、母語話者と非母語話者のストラテジーのちがいがあきらかになり、言語教育上有益な情報がえられるのではないかとおもわれる。今後の課題としたい。

また、今後は、他の助詞のつかいわけや接続様式などの文法事項について、分析をすすめたいとおもう。そして、文法面からのカード化、データ化をすすめ、ほかの日本語教育（あるいは第二言語習得研究）関係者が利用できる形でデータを希望者に公開することをめざしたい。

#### 参考文献

市川保子（1997）『日本語誤用例文小辞典』凡人社

大野 晋（1993）『係り結びの研究』岩波書店

金水敏、工藤真由美、沼田善子（2000）『日本語の文法2 時・否定と取り立て』岩波書店

迫田久美子（1998）「誤用を産み出す学習者のストラテジー—場所を表す格助詞「に」と「で」の使い分け—」『平成10年度日本語教育学会秋季大会予稿集』pp.128-134

- つくば言語文化フォーラム編 (1995) 『「も」の言語学』ひつじ書房
- 土屋順一 (1998) 「外国人学習者による日本語キーボード入力過程データベース」『日本教育工学会研究報告集JET98-6』 pp. 1-6
- 土屋順一 (2000) 『外国人学習者の日本語ワープロ誤入力の分析と外国人用漢字変換辞書の開発』平成9～11年度文部省科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書  
研究代表者土屋順一
- 土屋順一、土屋千尋、杉田幸代 (2000) 「外国人による日本語キーボード入力を支援する漢字変換辞書」『200年度日本語教育学会秋季大会予稿集』 pp. 265-266
- 寺村秀夫 (1990) 『外国人学習者の日本語誤用例集資料』特別推進研究「日本語の普遍性と個別性に関する理論的及び実証的研究」
- 沼田善子 (1992) 『日本語文法セルフ・マスターシリーズ5 「も」「だけ」「さえ」など一とりたて一』くろしお出版
- 横林宙世 (1994) 「中級・上級学習者の中間言語一助詞習得を中心に一」『平成6年度日本語教育学会春季大会予稿集』 pp.7-12

この研究は、科学研究費補助金基盤研究(C)(2)「外国人学習者の日本語作文キーボード入力過程の分析とデータベースの作成」(平成12～14年度 代表者:土屋順一 課題番号:12680300)の成果の一部である。